

Journey to my PhD@York in イギリス Vol. 3

浅野 貴博

University of York

Social Policy and Social Work

はじめに

私は2011年からヨーク大学 (University of York) のSocial Policy and Social Work学部の博士課程 (PhD: Doctor of Philosophyの略) に在籍しており、この10月から3年目に入りました。海外の大学の博士課程がどのようなものであるか、なかなか分からない部分も多いかと思しますので、今号では、ヨーク大学のPhDプログラムについて説明したいと思います。

なお、ヨーク大学と表記すると、カナダのトロントにあるヨーク大学 (York University) と混同されることがありますが、両者には何の関係もありません。

イギリスのPhDプログラム

最初にお断りしておきますが、これから説明することは各大学によってそのシステムも異なるため、大学間で共通している部分もあれば、ヨーク大学独自のプログラムもあります。また、用語に関して、英語表記の方が適当であると判断したものについては、無理にカタカナ表記をしたり、日本語に訳さずにそのままの表記にします。

イギリスの大学のPhDプログラムは、基本的にFull-timeの学生で3年、Part-timeで6年が修業年限で、それに加えてFull-timeの場合は1年、Part-timeの場合は2年の猶予期間が与えられ、その期間内に

博士論文 (Thesis) を提出することが求められます。以前は、留学生でもPart-timeの学生として登録することが可能だったのですが、イギリスの学生ビザである'Tier 4'の規則が厳しくなり、現在ではEU圏以外の留学生は、Full-timeでしか登録ができないシステムになりました。つまり、EU圏以外の留学生は4年以内に博士論文を提出する必要があります。ただし、様々な事情により4年以内に提出できない場合でも、学生ビザの延長 (※半年~1年という短期間のケースが多い) が認定されれば、引き続き研究を続けることも可能です。



ヨーク大学のメインキャンパスの中心部に位置する池。付近にはカモをはじめ、様々な水鳥が生息している。

イギリスとアメリカの違い

イギリスの大学と、アメリカやカナダの大学のPhDプログラムの大きな違いとして挙げられるのは、Coursework（授業）の有無です。アメリカの大学では、通常2～3年のCourseworkがあり、所定の単位 (Credit)を取得する必要があります。例えば、私がMSW (Master of Social Work)を取得したワシントン大学 (Washington University in St. Louis)のソーシャルワークのPhDプログラムでは、以下のようなCourseworkが組みられています（※一部です）。

- Introduction to Advanced Research
- Introduction to Social Measurement
- The Role and Use of Theory in Applied Social Research
- Foundations of Data Analysis
- Computer Applications for Data Analysis
- Multivariate Statistics

これらの授業を終えると、大学によってその呼び方は異なりますが、Qualifying examinationやComprehension examinationなどと呼ばれる試験を受け、博士論文を執筆するにあたり当該分野に関する十分な知識があることが認められれば、Doctoral Candidateとして博士論文に取り組むことができるというのが大まかな流れです。

一方、イギリスの大学のPhDプログラムでは、Courseworkを取る必要がありません。ヨーク大学では、Courseworkの代わりに全学部のPhDの学生を対象に様々なプログラムを提供しています。これらのプログラムは、PhDの学生や研究者の支援をする全国規模の組織である、'Vitae' (<http://www.vitae.ac.uk/researchers>)が作成した、'Research Development Framework (RDF)'という枠組みをベースにして提供されています。RDFは、以下の4つの領域 (domain)から構成され、各領域ごとに様々なプログラムが組み合わさっていて、その中から各自受講したいものを選択するというシステムになっています。

a) *Knowledge and intellectual abilities*

文献研究の方法、'Word'や'Access'、その他、文献管理ソフトの'EndNote'等の使い方など、研究を進める上での基本的な知識や技術を学ぶためのコースがあります。

b) *Personal effectiveness*

PhD取得後の就職に向けて、履歴書 (CV)の書き方や面接の受け方、研究者としてのキャリアの構築方法などについて学べます。

c) *Research governance and organisation*

研究倫理やデータの管理、研究プロジェクトの進め方などについて学べます。

d) *Engagement, influence and impact*

研究成果をどのように社会に還元していくかという点に関して、プレゼンテーションの方法、他の研究者との共同研究の方法、研究資金 (Grant)の獲得方法、さらにブログやTwitter等のソーシャルメディアの使い方などについても学べます。

さらに、上記のプログラムに加え、学部にもよりますが、修士課程 (Master)のための授業を聴講することも可能で、私も1年目に以下の授業を聴講しました。

- Introduction to Social Research Methods
- Advanced Qualitative Methods
- Domains of Social Work Research
- Evidence, Understanding and Justice



筆者の研究室のある建物 (RCSSはResearch Centre for Social Scienceの略)

先述のアメリカの大学のシステムと比較すると、イギリスの大学のシステムの方がより柔軟で、学生の選択の自由度が高いといえます。逆に、研究者の養成という点では、アメリカのシステムの方が、より系統立ったシステムが確立されていると思います。

Supervision

次に、PhDの研究を進めていく上で、最も重要な要素の一つと思われるSupervisionについて説明します。私の場合は、前号でも触れましたが、正式な入学申込みをする前に、現在のSupervisorであるIan Shaw先生 (<http://www.york.ac.uk/spsw/staff/ian-shaw/>)に、自分の研究を指導してもらえる可能性があるかをメールで問い合わせた結果、私の研究内容に興味を持ってもらい、縁があつて指導を受けています。大学によっては、学生が自分でSupervisorを選べないところもありますが、その場合でも発表されている研究論文等を調べて、事前にコンタクトを取ることは不可欠なステップです。仮に、その研究者が様々な事情で指導することが難しい場合でも、他の研究者を紹介してもらえることもあります。

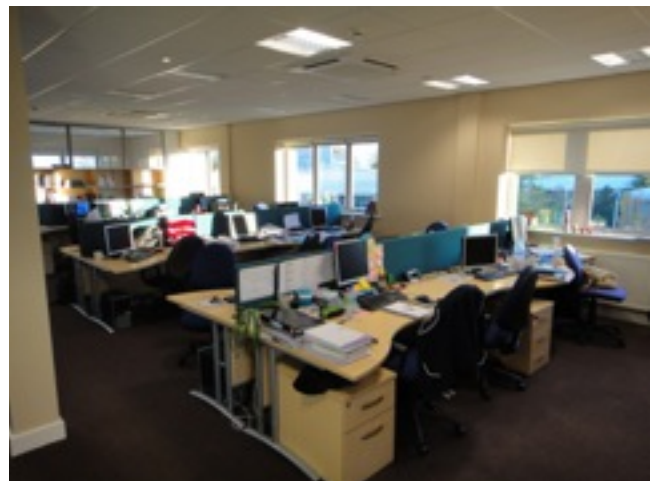
現在、私は上記のIan Shaw先生に加えて、Second supervisorとしてJuliet Koprowska先生 (<http://www.york.ac.uk/spsw/staff/juliet-koprowska/>)にも指導を受けています。しかし、同じ学部のPhDの同僚でも、私のように2名のsupervisorがいるケースもあれば、1名のケースもあります。Supervisionは定期的に実施することが求められていて、私の場合は毎回2名のSupervisorの同席のもと、約1ヶ月に1回のペースでSupervisionがあります。Supervisionの実施の間隔については、研究の進捗状況に応じて、Supervisorと学生の間で取り決められ、また、Supervisionがきちんと実施されているかを大学が確認するために、毎回のSupervisionの内容をSupervisorと学生の双方が記録するためのシステムがあります。

Supervisorと学生の関係は、基本的に対等であ

り、学生と言えども研究者のCommunityの仲間として見ているように思います。お互いにFirst nameで呼び合うのですが、Supervisorに対して敬称を付けずにFirst nameで呼ぶのは、始めはかなり抵抗がありました。Supervisorと学生の関係に関して、Supervisorから指導を'受ける'という側面はもちろんありますが、研究者としては未熟であったとしても、自分の考えや意見をきちんと伝えることを求められているのを、Supervisionを受ける度に感じます。一概には言えませんが、特に日本や韓国のように、年長者を敬うなどのPaternalisticな側面が強い関係の中で、指導を'受ける'、そして指導を'求める'という関係性に慣れている学生にとっては、厳しい関係とも言えるかもしれません。私の東アジア出身の同僚の中には、こうした関係性に戸惑い、彼らが望む十分な指導を受けられないことに対して不満を持つ学生もいます。

TAP (Thesis Advisory Panels)

ヨーク大学では、上記のSupervisionに加えて、各学生に1名のThesis advisorが割り当てられ、大体半年に1回の目安でThesis Advisory Panel (TAP)を開く機会が設けられます。このTAPは、Supervisorも同席のもと、当該学生の研究についてアドバイスを受けることができるシステムです。このシステムは、普段指導を受けるSupervisorとは違った、第3者の立場からの視点でのフィードバックを得られるという点で、非常に有効なシステムだと思えます。また、研究内容だけでなく、普段の



筆者の共同研究室

Supervisionが適切に実施されているかのモニタリングの役割も果たしています。例えば、Supervisorとの関係に満足していないケースなどは、このThesis advisorが相談の窓口になり、Supervisorとの間に立って解決にあたります。場合によっては、Supervisorの変更というケースもあります。

Confirmation of PhD registration / Upgrade

PhDの学生は、定期的にsupervisorからの指導を受け、さらに先述のプログラム等を適宜受講しながら、各々の研究を進めていくわけですが、最初の大きな関門として、Full-timeの学生の場合は18ヶ月以内、Part-timeの場合は3年以内、つまり修業年限の半分の期間内に、'Confirmation of PhD registration'と呼ばれる試験に合格する必要があります（※ヨーク大学では、呼び方を数年前に変更しましたが、'Upgrade'の方が一般的です）。このConfirmation of PhD registrationでは、それまでの研究成果をもとに、期限内に博士論文を完成させる上で現実的な研究プランであるかどうか審査され、無事認定されれば、'PhD candidate'として引き続き研究を進めることができます。合格できなかった場合は、通常6ヶ月以内に再度受けることができますが、そこでも合格できなかった場合は、PhDではなく、MPhilという学位に切り替えるように勧められます。このMPhilは、いわば博士号(PhD)と修士号(Master)の中間に位置づけられるイギリス独自の学位です。MPhilの論文は、PhDの論文と比べて、求められる水準に差があります。実際には、このConfirmation of PhD registrationに合格できないというケースはまれですが、私の留学生の同僚で、合格できずにMPhilへの切り替えを勧められたのですが、それを受け入れられずに退学を選択した人がいました。

Ethical Committee

先のConfirmation of PhD registrationと前後して、博士論文のための調査を実施するために、各学部が組織している倫理委員会(Ethical Committee)に具体的な調査プランを提出して、その審査に通る

必要があります。この倫理委員会は、博士論文のための調査だけではなく、学部のResearch staffによって実施される調査も含めた全ての調査に関して、その実施前に倫理的な問題がないかどうかを判断するための組織です。私の所属するSocial Policy and Social Work学部の倫理委員会は、計8名のスタッフで構成され、うち2名は大学外部の他分野の研究者が委員になっています。

Social Policy and Social Work学部では、何らかの支援を必要とする子ども、障がい児・者や高齢者等のいわゆるVulnerableと呼ばれる人たちを対象にした調査を実施することも多いため、研究目的や研究方法はもちろんのこと、サーベイ調査の場合はその質問用紙、インタビューを実施する際はその質問項目、さらに、研究倫理上の具体的な手続き等についての詳細な説明が求められます。審査は、倫理委員会でその研究内容をもとに匿名の2名のスタッフを選び、その2名それぞれからの承認を受ける必要があります。私のケースでは、それぞれから疑問点や修正点のフィードバックがあり、それらについての手直しをし、再提出後に承認されました。

Viva

最後の関門が、博士論文を提出した後に実施される'Viva'と呼ばれる口述試験です。Vivaは、博士論文の提出後、通常数ヶ月以内に実施されます。審査官(Examiner)は2名で構成され、1名はInternal examinerで、所属大学の指導教授(Supervisor)以外のスタッフが担当し、もう1名はExternal examinerで、所属大学以外の大学の研究者が担当します。Vivaは、原則的に上記の2名の審査官とPhD candidateで実施されます。ただし、審査官2名とPhD candidateの全員が認めた場合にのみ、指導教授の同席も可能ですが、審査に参加することはできません。Vivaの所要時間に決まりはありませんが、途中休憩を入れて1時間半～2時間程度が平均

です。長い場合は、数時間に及ぶこともあります。また、ヨーク大学では、Vivaの録音をすることが義務づけられています。これはVivaの様子を記録することで、PhD candidateがVivaの結果に納得できずに異議申し立てをした際の客観的な資料にするためです。

このVivaで、PhD candidateに求められることは、'To defend your thesis'です。つまり、提出した博士論文に関してなされる様々な質問に対して、審査官を納得させるに足る答えをしなくてはなりません。研究分野に関わらず、Vivaで問われる基本的な質問は以下のようなことです。

- 本研究のoriginalな点は？
- 本研究のstrengthsは？
- 本研究のcontributionは？
- 本研究のweaknessesは？
- 本研究を再度実施するとしたら、どのように実施するか？ (What would you do differently if you were starting again?)

しかしながら、Vivaの特徴としては、試験というよりも、研究者の一員として審査官と議論するという性格が強いかもかもしれません。そのため、審査官の意見に納得できる場合は柔軟に受け入れる姿勢を示し、納得できない場合は、きちんと反論することが求められます。

Vivaの結果はその場で本人に伝えられるのですが、その結果は次の3つに大別されます。

1) *Successful examination* (無条件合格) : Vivaの終了時に、博士論文が受理され合格となるケースですが、実際にはほとんどありません。

2) *Successful subject to minor revisions of thesis* (条件付き合格) : 1~2ヶ月以内に加筆修正の上、再提出をした後に合格となるケースで、合格の大半がこのケースにあたります。

3) *Thesis referred* (差し戻し) : 期限以内に加筆修正の上、再提出し、再度Vivaを受ける必要があります。上記2)のケースよりも重大な修正を求められ

るケースです。

おわりに

以上、ヨーク大学のPhDプログラムについて概観しました。私は、現在3年目で折り返し地点を過ぎたところです。日本でのフィールドワークで得られた様々な質的データと向き合いながら、何とか意味のある論文にまとめるべく、分析に取り組んでいます。

次回以降は、こちらでの生活の様子について紹介していく予定です。



前掲の池の付近で、gooseやduckにエサをあげる筆者と娘(4歳)。

